

Fair Trade as a Peace Construction

TAKAHARA Sachiko[†]

Abstract

Fair Trade is the movement for change the consumption culture in developed countries and to support labor environment and income for the producers in developing countries. The theoretical resources are from Gandhi 's economical thoughts and Gender reproductive theory in world economy, and Fair and Democracy will be the supporting concepts for Fair Trade. This paper questions the meaning of the handiwork involved in the knotting of the fabric of the misangas, which are made from recycled sari strings, a fair trade product, and considers these crafts as an activity for peace.

Keywords

gender, gandhi's economics, fair trade

平和構築としてのフェアトレード

高原 幸子[†]

キーワード

ジェンダー, ガンディーの経済学, フェアトレード

1. 問いの所在

ロシアのウクライナ侵攻の戦争が起きて、もうすぐ半年が経とうとしている（本論文執筆時2022年8月）。この間、明らかになってきたことは、国際関係論における平和の概念をもう一度見直し、民主主義という価値観を推し進めることが紛争を激化させる要因にもなっていることを確認しながら、なおかつ平和の理念を考え直す必要があるということである。⁽¹⁾

エマニュエル・カントの『永遠平和のために』

は、平和構築としての理念を提示している重要な文書であるが、そこでは、武装解除（軍隊を持たない）と民主主義、国際連合などの機関の存在が平和構築のために必要であると18世紀の時点で述べている。

ドゥルシラ・コーネルは、2000年以降のイラク戦争の時期に、アメリカ合衆国のリベリズムの良心とも述べることができるジョン・ロールズの『万民の法』を解釈し、国際法の概念の元となる民主主義や人権が全世界の文化を

[†] s-takahara@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

通じて捉えられるかと問い、また開発経済においてバングラデシュの飢饉やジェンダーを問うたアマルティア・センの「ケイパビリティアプローチ」を通じて、個人の多様な価値観と選択の自由度を文化として捉える可能性を示した。

こうしたコーネルの問いかけは、20年近く経った現状のロシアによるウクライナ侵攻の状況にも、もう一度より深化させて問い直される必要があるだろう。

まず、何よりも東西冷戦の構造とそれにより第三世界という呼び名で問われる南半球の国々のポストコロニアルな環境が継続する状況において、民主主義という価値観とジェンダー平等という価値観が、平和の構築に貢献することを本論稿では追究しようとしている。そのために、フェアトレード（民衆交易、公正な取引）という社会運動が出現した歴史が、ヨーロッパのキリスト教の慈善事業という背景とともに、アジア、アフリカ、南アメリカの開発の過程におけるNGOなどの国際協力・社会連帯の実践的なアプローチによる端緒から、経済的な生産者の支援ということにつながり、さらに生産物の消費に対する倫理的観点へと敷衍された状況を見ていきたい。こうした規模としては小さなプロジェクトの積み重ねが、抽象的な理念として現場では馴染まないような民主主義やジェンダー平等といった考え方を、具体的な物質として、その個々の象徴様式が醸し出す出会いや触れ合いとして見出す可能性が開かれる。

フェアトレードとは、自由貿易とは異なり、貿易により人々の生活環境を変化させる動きである。適正な収入と適切な労働環境を途上国の生産者に提供するように、先進国が獲得している富を農民や労働者に返還することとも言え換えられる。フェアトレードの認証機関などの国際的な組織もあるが、それはある国の行政機関や国連の一組織ではなく、独立した組織であり、多くの主要な市場において持続可能な取引を行っている。

こうしたフェアトレードの定義において、自由貿易という国際間のとらえ方のなかで、関税を免除される特別区のようなグローバル企業の在り方でもなく、保護貿易という日本の米に対する長年の政策に見られるような、グローバル化に対して自国の産品を保護するような文脈においてのみ捉えられる貿易の在り方でもなく、地域経済のなかにおいて、国際間の不均衡な貿易のなかにおける製品の生産者を支援する倫理的な経済の仕組みを考えることが目指されている。

民主主義は、西欧起源の試みとして見る事ができるか、という問いがあるが、日本の歴史のなかでも、農民一揆や宗教徒の一揆といった近代以前の出来事に民主主義的な視点を観ることもできる。こうした状況や、開発経済学が見る、バングラデシュやタイのなかで行われた近代化の在り方に焦点を当てるやり方ではなく、そこで行われた生産物（製品）の取り扱いが、民主的なコミュニティの試みとして示されている例は多く見られる。

「第三世界ショップ」や「シャプラニール」といった長年の関わりをバングラデシュで持つNGOが取引をする村や組合との関わりにおいて、開発援助からコミュニティの自立的な福祉へとシフトする様は、フェアトレードが国際協力活動の代替として浮上する時期と重なりあう。

タイの女性の性産業への出稼ぎの代替として、故郷の村において農業とその副次的収入となる布製品を制作すること自体も、正しいか正しくないかということではなく、別様の可能性を示すというフェアトレードの理念に合致した試みとしてとらえることができるだろう。

以上のようなフェアトレードの理念と実践的試みとをつなぐ理論的架け橋として、次の三点の議論を展開する。まず、インドの英国からの独立における思想的支柱となり、その後アメリカ合衆国の黒人解放運動へもその非暴力抵抗運動が影響を及ぼしたモーハンダース・ガンディーの思想を経済学的側面から考察し、フェ

アトレードの理念的源泉となる経済倫理として捉えたい。

第二に、世界経済を男女の区分として捉える仕組みとして、主に女性的空間を構成する家事労働について、クラウディア・ヴォーンホフ、ヴァンダナ・シヴァといった論者の生活圏の経済活動とジェンダーの労働の議論を捉えたい。そこから、ジェンダー平等という理念が、どのようにフェアトレードと重なりうるか、を問う。

第三に、表現や技芸としての制作が、フェアトレードの生産品には伴うが、それを労働という側面からだけではなく、遊技という文化を創り出す側面としての在り方を問う。

こうした展開から、フェアトレード製品としてあった南アジアのリサイクルサリーの紐を、ミサンガとして制作した試みから、その結び目の遊技性を論じたい。

2. ガンディーの経済学

モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー(1869-1948)は、経済思想としてユートピアを描こうとする理想主義者ではあったかもしれない。それは、近代化しつつある過程において、機械使用に基づく近代的工業生産への反対、外国製品のボイコットなどを牽引し、村落の工業を守ろうとしていた点において、現在のフェアトレードの理論的源泉としての経済倫理を打ち出している。

ジェレミー・ベンサム「最大多数の最大幸福」という定説や功利主義に対し、ガンディーは全体主義的見解ではなく、個人の選好という問題として提示していた。開発経済の議論では、工業化が進み、都市化が進むことによって所得が上がり、生活スタイルが変化するという説が捉えられる。タイの女性たちが性産業へと農村地域から移住するという状況においても、この経済発展は連動している。

ガンディーの主張を経済的側面から解釈するアジット・K・ダースグプタは、倫理的選好と

スワデーシー運動、またその構造的な背景としての受託者制度の考え方に注目する。受託者制度とは、1917年のロシア革命に続いてインドで普及し始めていた社会主義・共産主義の教義に対する代替の考え方として展開されていた。ガンディーは、合法的に富者から期待することができるのは、彼らの富を信託のもとに置き、これを自らの私利私欲のためだけではなく、社会全体の奉仕のために使用するということだという。(ダースグプタ pp196-203)

ガンディーは、貧者のために、とりわけ不可触民の境遇や女性の境遇に対して変革が必要だと考えていた。先述したロールズも、最も不遇な集団のために社会的設計を考えるというリベラリズム(自由主義)を展開していたが、こうした発想と、近年のアジア新興国の発展が中間層の購買力の展開といった経済的市場の開拓という側面として見られることに対して、人々の福祉(well-being)を個人の視角から、グローバルな規模で見出す可能性を模索している。

資本主義の根幹にあたる私的所有の概念は、土地の権利から人権、身体や関係性へと波及しており、個人はその前において社会的存在であるということが、利己的な個人を形成することに役立っている。こうしたなかにおいて、ガンディーの思想を、今一度、人間らしい最低限の生活水準と私的自由の両方を兼ね備え、なおかつ利他的な道徳の在り方をも加味した経済的倫理として見出す可能性について論じたい。

一つ、物乞いに関するガンディーの考え方で、それをどのように経済倫理へとつなげるのか、という問いがある。ガンディーは、インド・カルカッタへの訪問の際、実業家による私的な慈善行為として、何百人もの飢えた人々が無償で食料を提供されていた光景に対し、「この行為は気高いことでも名誉あることでもなかった」(ダースグプタ p60)としてこうした慈善が、現実に貧困、怠惰、偽善、犯罪の原因となり、食料が努力なしに獲得できる場合、怠ける人が一

層貧しくなるという視点を提示している。これは、経済学におけるフリーライダーの論理として、もし、ヨーロッパを中心に思考されているベーシックインカムという基本的な所得補償をすると、その制度によって働く必要がなくなり、制度のただ乗り状況となる人々が出現するという仮定と、考え方として近似している。日本においては、これは生活保護制度として機能しているが、こういった批判は常に繰り返される。

タイとビルマとの国境地帯において、ほぼ出自は山岳民族であるストリートチルドレンを、食べる物と寝る場所の提供をしながらさらに言語教育等を施しながら受け入れていったNGOは、こうしたフリーライダーの論理によって捉えられる環境ではないが、例えばセックスワーカーの人々への支援（女性保護事業）や野宿者支援といった文脈の先端部分において、常に沸騰する人々の心性や論理とも近似している。ウクライナ難民支援において、また売春防止法において設立された女性保護施設においても、清潔でアイロンがかかったシーツが敷かれたベッドで眠ることができるということは、贅沢なことなのだろうか、という問いかけが出現する。

ガンディーは、決して「他者を助ける」といった原理が物乞いへの慈善を正当化するのではなく、倫理的諸原理から実践的に判断するという選択を促し、その一つとして「糸紡ぎ」の労働や、公益のための乳製品の販売所設立などが示された。

こうした労働組合や生活協同組合の先駆けのような思想は、生産者および労働者の側だけではなく、消費や市場の需要といった側の議論へと敷衍していった。スワデーシーという国産、地元産を尊重する運動へと広がっていったが、その運動は、1930年代にインド国民会議派がガンディーの指導下で実施した大衆運動であり、とくに都市に住む人々に対して、外国製品よりインドの製品を、工場の製品よりも村落工業の製品を消費する習慣を身に付けるように奨

励するものであった。（ダースグプタ p41）彼らは、特にカッダル（手紡ぎ車を使って村人たちが紡いだより糸で織られた服）を着るように勧められていた。

ガンディーは、都市における大規模生産が、複雑な機械の助けを借りてかぎりなく少人数で行う生産であり、大衆の利益には奉仕しないとし、その代わりにより望ましいのは、村落工業における自営を通じた生産を、地域において「財の分配」と「生産」が同時にあることによって平等化するものであると示した。

さらに、市場の追求を経済的帝国主義の原動力と見ており、ヨーロッパ産業革命の時代は、アジア・アフリカ大陸における領土獲得と列強同士の戦争によって特徴づけられ、インドは、イギリスの工業生産物（綿織物）の専属市場として機能した。さらに、こうした流れが、当地の人々をして自身の文化から切り離し、外国製品への嗜好を刺激するような方向を導いているとしていた。（ダースグプタ p126）しかし、資本や労働などの生産要素が、財の生産において相互に代替されうる程度を示す尺度は、その生産物に固有であり、製鉄業などの重工業、外科手術の器具、救命器具の一部、また衛生水準改善のための水洗便所の導入などは肯定し、（ダースグプタ p129）産業すべてにわたって機械の導入に反対したわけではなかった。

それに対し、ガンディーが考える糸紡ぎは、農業従事者の副次的な産業として捉えられていた。都市への人口の集中と、村落の過疎化や工芸文化などが継承されないような問題は、生産と消費を結びつけ、倫理的嗜好として村落の品物を選択するように推奨することへとつながっていった。（ダースグプタ pp48-49）

糸紡ぎは、農村の失業に対する解決策でもあった。農業労働は季節的であり、さらに不作や飢饉が起これば非自発的失業の程度は大きくなり、多くが飢えや病気で亡くなった。糸紡ぎは、半飢餓状態で半雇用状態の無数の人々に、

飢餓に対する保険とともに、パートタイムの雇用を提供した。(ダースグプタ p49)

もちろん、糸紡ぎではなく、その他の産業である牧畜や機織も、農業を補完するための代替産業として挙げられていたが、それに対し、糸紡ぎは「もっとも簡単でもっとも安く、もっとも良い」ものであり、「最小の支出と組織的努力で最大多数の村人たちの懐に金銭を投入する」もっとも経済的な手段であった。こうしたなかで、スワデーシーの製品は、使用されているか、というよりもむしろ、そうした品物の生産に人々が参加しているか、ということが大事であるとされたのだった。ゆえに、他の競合する産業に対し、糸紡ぎは潜在力を有していたといえるだろう。(ダースグプタ p50)

3. 世界経済における女性の家事労働

女性の再生産の領域という明確な指摘は、マルクス経済学の領域から、ジェンダーの指標を示したことにより、浮上した。再生産とは、経済構造内在的な理論というよりも、具体的な家事、育児、介護、売春（性労働）、介助、看護等を含み、生活領域全般の領域が、生産という構造を成り立たせるために必須の領域として存在する、とする。

こうした領域は、主に工業化（産業化）するなかにおいて、家庭内の主婦的存在が経済構造のなかの必須の領域として浮上するという論理となるが、イマニュエル・ウオーラーステインの提示した世界システムにおいて、農業を中心とした開発途上国の事態を説明するのは、もう少し複雑な論理となる。

マリア・ミースやクラウディア・フォン・ヴォールホフ、ヴェロニカ・ベンホルト・トムゼンは、開発経済における環境の持続可能性との連関のなかで、女性の担い手たちがより主婦化するということを指摘している。ここで主婦化という定義は、国際労働力移動における女性の再生産の担い手たちが、先進諸国が生産中心

主義的な思考によって再生産労働を正当な労働の範疇から除外し、これにより低所得の国々から女性移住者に肩代わりさせることを含む。(高原 p15)

タイ・ビルマ国境における若年女性の家族背景から、木の実を採取したり、川で魚を釣ったりといったことで生計をたてる手段としているということも浮かび上がり、より原初的な生業が資本主義の周辺において起こっているということは言えるだろう。(高原 pp17-23)

ケニアにおいてナイロビから約60キロメートル東に位置するタラでは、女性たちはともろこしやその他の産物を家族の消費とともにローカルな市場において売って生活している。ここでは、持続的な農業というものは、生活の糧を稼ぐ主要な供給源である。また、タラでは、年間を通じた降雨が足りず、低地でもあるための水不足で、女性たちは雨季でも乾季でも30分から2時間かけて歩いて水を求めに行っている。(Smith, pp14-15)

生活を成り立たせるということは、生存に直結しており、その環境において、作物を育て、自給自足とともに、換金作物としてローカルな市場でも取引をする。そのなかで、倫理的（エシカル）な取引にするためには、小規模自営者が、グローバルな農産物価格の変動に影響を受けすぎず、自立した経営を保つことができる環境を整える必要がある。

「主婦化」という定義は、生活維持に関わる食糧生産や、休息も含めた生命維持のケア労働によって、生産を支える領域が女性たちに掛かっているという状況となり、「再生産」によって経済的な生産領域を支える仕組みとなる。それゆえに、フェアトレードの考え方として、途上国の生産者が経済的に自立し、中間業者に搾取されない仕組みを支援するということには、再生産の領域が安全に保つことができるよう、身体や食、医療保健の分野を含めて支える仕組みとして考えられる必要があるだろう。

インド北東部のダージリン地方で栽培されている紅茶は、女性たちが携わる、よりグローバルマーケットに近い産品である。紅茶という一つの産品はプランテーション農業としてなされる。経済的な捉え方からすると、再生産領域は、インフォーマルセクターとして女性たちの私的領域に重なる生産構造となり、起業した自営農民として成立する。(Sen, pp7-11)

こうした起業家的精神というものは、イギリスなどの先進国を中心に注目されている新自由主義⁽²⁾ という競争精神の視点から展開される、社会福祉的なレジリエンス⁽³⁾ であるとして批評される観点であろうか。

もちろん、バングラデシュのグラミンバンクに代表されるような、村の銀行によって、特に農村女性に対して融資貸付を行うことで、経済的自立の視点が導かれるという事例をバングラデシュやタイ、フィリピン、また先述のケニアやインドにおいても見ることができる。

家事労働を中心にした生活に根差した領域である再生産領域は、やはり、変わらぬ生産中心的思想である新自由主義の競争的精神により、人びとの福祉 (well-being) をより切り詰めさせ、例えば、離婚した親を持つ子供の「自己回復」という言葉を生産中心的思想へと転化させていく方向に晒される。こうした際に、フェアトレードや倫理的経済といった観点が、再生産領域の営みを支援する方向にすることが望まれるだろう。

4. ミサンガを通じた布の結び目に対する考察

2022年5月28日に金沢市役所前広場で行われた、かなざわフェアトレードフェスタでは、金沢星稜大学のFTGsというフェアトレードサークルにおいて、布をテーマにしたフェアトレード産品を取り扱い、そのなかにおいて南アジア、特にインドにおけるサリー、バングラデシュでのサロワカミーズなどの余った民族衣装

をより合わせた、リサイクルの紐によってミサンガを制作した。

これは、願掛けをしてミサンガの紐が切れるとその願い事が叶うという言い伝えがあり、またサッカーなどのスポーツにおいて選手や応援者のファッションの小物としてもよく見られる。手首や足首につけたり、バッグにアクセサリーとして装着したり、色とりどりのリサイクルサリーはファッションのワンポイントとして映える。

ブラジルのサッカー選手が身に付けていたものが、日本でミサンガとして広まったというのが現在の細々とした流行であるが、もともと古代の日本においても伝統工芸として組み紐があり、またマクラメというアラビア語発祥の幾何学模様の手芸品も類似した工芸として存在している。

こうしたミサンガは、編める人に一緒に編むことで教えてもらい、それを動画で撮影したりしながら、学生たちが覚え、当日は、体験ワークショップとして訪れたひとたち、子供たちと一緒に編んでお土産にしてもらった。体験は200円、既に出来ているミサンガ150円という値段である。

この制作は、ガンジーの糸紡ぎの思想や村落の産品を尊重するという姿勢が反映されている。特に、紐は古着をリサイクルされたもので、大量消費に対するオルターナティブを提示しているとともに、ミサンガ編みは複雑で高度な技術が必要となるのではなく、簡易な材料で誰もが編むことができ、体感で伝えることができる技芸である。

一つのミサンガを編み込むには、同じ結び目を10個以上作り、その結び目が模様となり、その編みの過程の身体に思いを馳せる。ここにこそ、マスとして大衆の身体ではなく、個体としての身体の痕跡が浮かび上がる。綿布の繊維と人間の手指との物的過程は、非意識的であり、生物学的身体の外で起こる物質的過程に開かれている。

一本の糸が織り込んで輪っかを作り, それをねじれさせていく作業により, 網の目ができていく。その網の目が反復されて模様が出ていく。こうした過程について平倉圭は, 非言語的な形象の思考として, 芸術制作の際の動的パターンとしている。(平倉 pp3-18)

つまり, 詩や音楽といった現象がなんらかの具体的な形の布置によって, その内的論理を携えていると考えることができる。韻やリズムといった形象のパターンが, 繰り返され, それが複奏化し, さらに物的に統合されていく。

料理をすることの手仕事の意味へと, 以上の思考は敷衍することができる。包丁, まな板, 鍋, フライパンといった道具は必要であるが, それを用いて切る, 炒める, 煮るといった工程を手作業で繰り返し, 味付けをして混ぜていく。焼くという一つの作業工程においても, 火の強さを調節し, ある一定の時間をかけて見守っておかないと, 美味しさを引き出すことができない。こうして, 手仕事は, 一つの物質を輻輳的に美味なものへと導いていく。

再生産として数量化してかかった時間を計算されるようなあり方に対し, こうした手作業が生み出す芸への作業工程は, 遊びの時間とも言い表すことができよう。

それは, 「遊技と労働のあいだ」として指し示すことができる。

文化に先行する人間の在り方として, ヨハン・ホイジンガやロジェ・カイヨワによって定義されてきた, 遊ぶ人としてのホモ・ルーデンスは, 先述してきた労働と経済に対する見方を覆す側面がある。

こうした遊技としての時間の流れは, 労働として生産性を上げるという思考より, 我を忘れて没頭する, 繰り返す反復それ自体に愉悦を感じる, などの仕草を生み, 今ここの営みを肯定する。手仕事のその芸の在り方は, さらに物質的統合性へとつながり, 遊技としてその美的技法をモノとして示す。こうしたミサンガを衣服

として, アクセサリーとして身につけるということは, その背景である南アジアの民族衣装の日常着の世界へと物語が広がり, その想像が芸術と相まって異世界/他者の世界観へと結びつくだろう。

5. 結論

ガンディーの経済学から導き出せる, どの程度, フェアトレードの商品が出回っているか, という観点よりも, むしろそのモノの制作にどれくらいの人々が参加しているか, という観点のほうが重要度が高いということは, 民主主義的な経済の在り方を示唆している。

物質文化とは, 衣食住といった生活・生存に密着した営みから産み出されるモノであり, そこには貨幣経済以前の象徴様式の世界が広がっている。資本というモノ自体は, 象徴様式のなかで意味や記号として機能するのであり, 生の営みを想像する象徴様式の世界が物語として存在する。こうした力学が, 私的領域や家事, 生活といったジェンダー(社会や文化における性的差異)からすると女性的領域に結びついており, フェアトレードとは, 力学を平等に, 公平に志向しようとする試みである。

現に起こっている戦争に対して, フェアトレードの思考および営みが, どのように寄与するかは計り知れないところがあるが, カント, およびその思考を引き継いでいる人々は, 戦いを防ぎ, 人々の日常の暮らしを守る平和の構築には, 民主主義を基軸にして社会構想をする必要性を示している。

人間が統御しうる以上に物質的過程は, それ自体で一つの世界を構成しているが, 制作や生産に携わる人の環境と状況を, 遠く離れた土地からであっても, モノを通して想像し, 支援するという営みとして, その物質的過程に起きる力学を公正におこなっていくのが, フェアトレードであると言えることができるであろう。

非常に個人的な物事が, 実は世界情勢とつな

がっているという例は、家庭内で起こるドメスティック・バイオレンスを未然に防ぐという状況から、多くはその場から逃げるといった選択にかかってくるのであるが、そこから暴力や戦いを修正する社会的知恵は蓄積されている。フェアトレードという倫理的経済を支える知恵とは、ジェンダー平等や民主主義という概念であ

るということは明白であり、そこから平和という世界を構築するすべを携えている。ミサンガを作る、という一見世の中で起こっている戦争という出来事とは関係がないと思われる事象も、距離的には遠く離れた場所で起こっている人々の営みへの想像力という意味において、平和とつながっているとと言えるだろう。

注

- (1) 民主主義を進めることが、結果的に戦争を誘発するという観点は、国際関係論の枠組みにおいて言及されることがある。現在のロシアのウクライナ侵攻においては、大国の全体主義的なあり方が、民主主義的価値観を抑え込むという構図において見ることができる。
- (2) 新自由主義とは、官営の事業を民営化するなどを通じて、個人に対する福祉対策を減じ、個人の自己責任を促す側面が見られる。アジア地域での新自由主義の展開は、オング『《アジア》、例外としての新自由主義』を参照のこと。
- (3) レジリエンスとは、自己回復と言い換えることができ、女性や子供で暴力に遭った場合にそこからの立ち直りにおいて指摘される技法と説明される。戦争、自然災害などにおける被災において、復興という価値観に近似している。マクロビー『フェミニズムとレジリエンスの政治』においては、若い女性が自己を操作するという視角から傷からの立ち直りを指摘しており、そこに置いて新自由主義を貫くための技法として、傷や弱さの操作として捉えており、相容れない脆弱性はそのまま残り続ける。

引用（または参考）文献

- Debarati Sen 2017 “Everyday Sustainability-Gender Justice and Fair Trade Tea in Darjeeling” Suny Press
- Kiah Smith 2014 “Ethical Trade, Gender and Sustainable Livelihoods-Women small holders and sthicality in Kenya”, Routledge
- Martha Nussbaum and Jonathan Glover, Ed. 1995 “Women, Culture and Development-A study of Human Capabilities”. Oxford University Press
- Rosi Braidotti, Ewa Charkiewicz, Sabine Husler, Saskia Wieringa 1994 “Women, the Environment and Sustainable development Towards a Theoretical Synthesis” Zed Books
- ドゥルシラ・コーネル、仲正昌樹監訳、近藤真里子・高橋慎一・高原幸子訳『理想を擁護する—戦争・民主主義・政治闘争』作品社、2008年（Drucilla Cornell 2004 “Defending Ideals-war, democracy, and political struggles” Taylor & Francis books, Inc.）, 第3章, 第4章
- アジット・K・ダースグプタ、石井一也監訳『ガンディーの経済学—倫理の復権を目指して』作品社、2010年（Ajit K. dasgupta 1996 “Gandhi’s Economic Thought” Taylor & Francis Books, Inc）
- アイファ・オング、加藤敦典・新ヶ江章友・高原幸子訳『《アジア》、例外としての新自由主義—経済成長は、いかに統治と人びとに突然変異をもたらすのか?』作品社、2013年（Aihwa Ong. 2006 “Neoliberalism as Exception: Mutations in Citizenship and Sovereignty. Duke University Press）
- アンジェラ・マクロビー、田中東子・河野真太郎訳『フェミニズムとレジリエンスの政治—ジェンダー、メディア、そして福祉の終焉』青土社、2022年（Angela Macobbie, 2020 “Feminism and the Politics of Resillience: essays on Gender, Media and the End of Welfare”.)
- イマニュエル・カント、宇都宮芳明訳『永遠平和のために』岩波文庫、1985年
- 高原幸子『媒介者の思想』ふくろう出版、2006/2015年
- マリア・ミース、C.V. ヴォールホフ、V.B. トムゼン、古田陸美・善本祐子訳『世界システムと女性』藤原書店、1995年
- 森田桐郎編著『世界経済論—《世界システム》アプローチ』ミネルヴァ書房、1995年
- マリアローザ・ダラ・コスタ、井田久美子・伊藤公雄訳『家事労働に賃金を—フェミニズムの新たな展望』インパクト出版会、1986年
- 山森亮『ベーシック・インカム入門—無条件給付と基本所得を考える』光文社新書、2009年
- 平倉圭『かたちは思考する—芸術制作の分析』東京大学出版局、2019年